

学習院アーカイブズ ニューズレター

Gakushuin Archives Newsletter 2025.7.16 vol.

25



南5号館（大学計算機センター）端末実習室（1983（昭和58）年8月10日竣工）

計算機センターの歴史は、南2号館の一角から始まった。1978年には当時の4学部（法・経・文・理）すべてに情報処理関連科目が開設されたが、確保できる座席は20名程度の規模であった。南5号館の端末実習室では54台の端末が準備され、1台あたり2名が座って実習できる体制が整えられた。（学習院アーカイブズ蔵）

Contents

日本人は「いにしえ」から記録好き？ 学習院アーカイブズ 室長 佐藤 吉孝	2
「雑文」家としての安倍能成 学習院アーカイブズ 桑尾光太郎	4
京都学習院の事務文書 一ある ^{ざっしょう} 雑掌の備忘録 学習院アーカイブズ 小根山美鈴	6
主な活動（2025年2月～2025年6月）	8



日本人は「いにしえ」から記録好き？

学習院アーカイブズ室長 佐藤 吉孝



令和6年11月1日に学習院アーカイブズ室長に就任した佐藤吉孝です。

学習院アーカイブズ室長は、学習院アーカイブズ規程第5条に「室長は、総務担当常務理事とし、院長が委嘱する。」と規定されていることから、室長を仰せつかったわけですが、令和5年から、事務局長の立場でアーカイブズの打ち合わせには参加しています。

1. 最初にアーカイブを意識した体験

私は、毎年秋の恒例行事として、奈良国立博物館で開催される「正倉院展」に出かけることにしています。

最初は、大学時代の友人から、「正倉院のお宝を見に行かないか」と誘われたことがきっかけで、樹下美人像で知られる「鳥毛立女屏風」や「螺鈿紫檀五弦琵琶」、遥かなシルクロードの旅路を偲ばせるカットガラスの「白瑠璃碗」などの誰もが珍しいと思うような美術・工芸品などの展示を見に行くことを楽しみにしていました。

展示品の中には、奈良、平安、鎌倉時代の古写経や東大寺献物帳等の一部の文書類もありましたが、最初はほとんど素通りしていました。

そんな私が正倉院展に通いだして数年経過した頃、文書類に興味を持ったきっかけは、展示品の中に奈良時代の戸籍の台帳があるのを見つけたことでした。

戸籍の台帳は、書き手によって少し癖のある文字だったりしましたが、そこには文書として家族が何人いるかなどが記されて丁寧に記録をとっていたことがわかりました。

また、よく見ると、戸籍の台帳の隣には当時の一つ一つの村々の納税について、集落の納税の様子がわかる記録も展示されていました。

まさに当時のお役所の記録（公文書）が、1300年の時空を超えて、現代の私たちの前に姿を現したのです。

後で調べたところ、正倉院には現存最古の戸籍である大宝2年（702）の戸籍も残されていることもわかりました。

日本でも奈良時代から公文書の記録を残しているなんて、アーカイブのさきがけではないかと思った

ものでした。

こうなると古代の記録にがぜん興味が湧いてきましたので、素人ながら、少し調べることにしました。

皆さんもご存じだと思いますが、古代には紙は大変貴重だったので木の札に墨で文字を書くことがあり、「木簡」と呼ばれていました。そういえば高校の日本史の授業で教わった記憶が蘇ってきました。（高校時代もっと勉強しておけばよかったと今更ながら反省しました。）

古代社会において、大量の文字を駆使するのは国家の官僚などの少数の人に限られていたもので、「木簡」が出土するのも平城宮などの都城などで役所などの公的施設が多いこともわかりました。

そこで、翌年の正倉院展に合わせて、奈良文化財研究所の「木簡」の実物の展示を見にいきました。

その解説によると「木簡」は地下水と泥につかっていたことで保護されて、空気に触れていなかったもので、汚損が進まずにとっても保存状態がよいことが書かれており、実際の「木簡」を見ると書いてある文字もしっかりと読むことができたのには非常に驚きました。

「木簡」で有名なのは、1988年に平城宮の外側の遺構で出土された「長屋王家木簡」です。

「長屋王家木簡」は、極めて良好な保存状態で膨大な量の木簡が出土され、その内容も長屋王家の内部にどのような人々が居住し、働いているのか。王家の家政を支えるためにどのような組織があり、どのような物品が運び込まれていたのか、私的な家の運営の詳細が記録されているということでした。

先に記載したとおり、役所の公文書ばかりでなく、王家という私的な記録も奈良時代から残されていることから、日本という国は、この頃から記録することの大切さ（アーカイブの大切さ）を認めていたということにあらためて、感心しました。

2. 学習院アーカイブズとの関わり

平成23年（2011年）に学習院アーカイブズの前身の総務部の院史資料室から、院長直轄組織として、「学習院アーカイブズ」が発足しました。しばらくは、学習院アーカイブズの執務場所は西5号館のB1Fであったため、同じフロアにある事務部門の共同倉庫を利用する際に、事務室を横目で見えることは

ありましたが、立ち寄ることはありませんでした。

当時、職員として大学の学長室に在籍していた私にとって、学習院アーカイブズは、学習院の歴史的な資料を整理・保管する部署というイメージで、過去の記録を取り扱い、選別確認し、保存することを任務とする部署であり、自分たちには、直接は関係ない部署という認識でした。

その後、平成24年度末から、学習院の事務部署が、統一的な手法・手順に基づく学内事務文書の整理・管理を始めたため、このあたりから、学習院アーカイブズは、決して過去の記録ばかりだけでなく、自分たちの業務の文書ファイルの整理点検を通じて、現在の私たちにも直接関わりのある部署として認識を新たにしたところです。

学習院アーカイブズとの関わりとして特に印象に残っているのは、平成27年頃だと思いますが、当時いくつかの大学事務部署の管理職を兼務していましたが、その中のある部署の文書の保管スペースが手狭で、共同倉庫にもスペースがなかったため、総務部や、施設部等に相談しましたが、なかなか良い解決方法が見いだせませんでした。そこで、最後にたどり着いたのが、学習院アーカイブズでした。

文書ファイル管理簿を提出した際に、「過去の非現用文書ファイルを何とか学習院アーカイブズで預かっていただけないだろうか」と学習院アーカイブズに相談したのでした。

学習院アーカイブズ事務室の方には、我々の苦しい立場を説明して検討していただきましたが、「しばらくは当該部署で保管してもらい、学習院アーカイブズに保管スペースが整ったらお預かりします」というような結論だったと思います。

現在の学習院アーカイブズは、西5号館B1Fの元の事務室を収蔵庫専用として、北別館に事務室が移転したため、以前よりも保管スペースが増えたので、保存が必要と判断された非現用文書は学習院アーカイブズに保管してもらえますが、当時の学習院アーカイブズは、保管スペースがとても少ない状況でしたので、今思えば、この結論も仕方がなかったのでしょう。

それでも、当時、一番親身になって検討いただいたことで、学習院アーカイブズには、非常に好印象を持ちました。

3. 学習院アーカイブズのこれからについて

学習院アーカイブズの打ち合わせに参加して初めてわかったことは、学習院アーカイブズは、事務部門の移管文書の選別・整理・管理以外にも肅々と、下記のとおり、いろいろな仕事をこなしているということです。

(1) 学習院の卒業生や元教職員から寄贈された資料の整理・分析や受け入れるにあたっての各種の調査を行っています。ニューズレター第24号の資料

受け入れ（受贈）記事参照

① 荒川一郎前大学長から寄贈された、木下是雄元大学長の南極観測関係資料（フィルム等）などは、国立極地研究所まで、アーカイブズの職員が来歴調査に出向いた結果、今月（令和7年6月）にフィルム上映会を開催する（予定）など、受け入れた資料に関して積極的にフィードバックを行っています。

② 川内優輝氏箱根駅伝関係資料などは、桜友会主催の特別講演会が契機となって、マラソンランナーの川内選手から箱根駅伝の関東学連選抜として当時付けていたゼッケンや履いていたシューズ、応援の横断幕などを寄贈いただいたことから、川内選手を当時応援した教職員から、来歴などを報告していただき、アーカイブズでまとめています。

(2) 広報課や各学校からの依頼に伴う外部への発信情報（学習院関係の史資料）の調査・確認作業

学習院アーカイブズには、広報課や各学校から情報発信する際の学習院関係者の資料の確認や、外部からの記事確認依頼に対して、徹底した調査を行っています。

(3) 上記以外にも中期計画予算により以下のような取り組みを現在行っています。

① 創立150年記念誌の編纂作業

② 「学習院勅額の調査研究」…アーカイブズの職員の調査は始まったばかりですが、学習院勅額については、調べれば調べるほどその謎は深まるようです。

③ 大学と女子大学の統合に伴う女子大学収蔵資料の保存体制の確立検討

④ そのほか、学習院関係者、学習院の卒業生から寄贈資料（又は寄贈の打診をいただいた資料）の調査

上記のとおり様々な仕事をしている学習院アーカイブズについて、もっと知ってもらうにはどうしたらよいか次のことを考えています。

一つは、今も年間2回発行される「学習院アーカイブズ ニュースレター」で活動報告をしています。今後は、学習院アーカイブズが行ったこれらの仕事をもっと学内外にアピールする方法はないか。

もう一つは、年々増える資料に対して、数年後には、学習院アーカイブズの収蔵庫も満杯になる恐れがあること。

正倉院の文書のように学習院のアーカイブ（記録）も学習院が続く限りは、後世に残していかななくてはなりませんので、その収蔵対策に関してもよい方法がないかを検討していきたいこと。

上記の2つは、いずれも、すぐには妙案が出るものではないですが、将来の学習院アーカイブズを見据えて考え続けていきたいと思っています。

「雑文」家としての安倍能成

学習院アーカイブズ 桑尾 光太郎

教養主義と安倍能成

『教養主義の没落—変わりゆくエリート学生文化』（竹内洋著 中公新書）という本が話題になっている。刊行は2003年だが、ある人気ミュージシャンが「べらぼうに面白い」と絶賛したことがきっかけらしい。「教養主義」とは、『広辞苑』（第七版）に「人格形成において人文的な教養を重視する立場、西洋ではゲーテなどのロマン主義文芸、一九世紀のドイツ・イギリスの理想主義哲学が代表的。日本では明治中期以降の夏目漱石や、大正期の阿部次郎・和辻哲郎・安倍能成などが指導的存在となった」と記されている。そして竹内は前掲書で、「教養主義の文化エージェントは、なんといっても岩波文庫をはじめとする学術・教養書出版をおこなった岩波書店である」と述べている。

安倍能成（1883～1966）は、第一高等学校時代の友人岩波茂雄による岩波書店の創業に協力し、自らも哲学書を執筆して日本における教養主義の成立に深く関わった。その後、京城帝国大学法文学部長、一高校長、文部大臣など教育界の要職を歴任し、学習院長もそのひとつだった。



安倍能成（1947年頃）

他方で、桃山学院大学の高田里恵子教授が、「安倍能成の伝記的記述をとおして描く大正昭和の文化と政治の諸相」をテーマに科学研究費（領域番号22K00498）の助成を得て、論考を次々に発表した。その表題は①「安倍能成

をダシにして日本における保守とカリベラルとかを考えてみる」（synods.jp/opinion/society/23014）、②「安倍能成とは誰だったか？—彼に語らせずに彼を語る—」（桃山学院大学『人間文化研究』16号）、③「純粹をめぐる闘い—安倍能成と野上彌生子—」（同誌19号）、④「大正教養主義の二世たち—安倍能成と野上彌生子 その2—」（同誌21号）、⑤「安倍能成、悪しき家父として」（同誌22号）、⑥「安倍能成、ダメ学者と呼ばれて（も）」（『ドイツ研究』57号）と続いている。高田の視点は、教養主義つまり旧制高等学校を中心とするエリート男子の学生文化について、皮肉たっぷりの愛情をこめて論じた『文学部をめぐる病い—教養主義・ナチス・旧制高校』（2001年 松籟社、のちちくま文庫）の頃から一貫している。今回の諸研究でも「愛あるイジリ」は健在で、例えば前掲⑥では、安倍には学術的な著作がほとんどない、との批判を紹介して次のように述べている。「晩年、著名人として色紙を求められると『正直第一』と書いただけのことはある（中略）ダメ学者安倍への批判はおおむね当たっているが、安倍が自分自身で正直に言っているところでもある。」

学習院で書かれた「雑文」

高田は今後の研究課題として「安倍能成には、著作に収められていない膨大な雑文や対談・座談会、政府関係資料（文部大臣や貴族院議員を務めたため）が存在している。そうした資料の収集と整理に、引きつづき努めているが、考えていたより多くの未収録雑文が」あり、その調査確認はやや遅れていると記している（2023年度実施報告書）。「雑文」との表現がふさわしいか否かはともかく、安倍が学習院長・学習院大学長として執筆し、しかも単行の著作には収められていない「雑文」は大量に存在し、学習院アーカイブズや学習院大学図書館などに残されている。

たとえば「学習院大学設立趣意書」（1949年）や「学

習院大学短期大学部設立の趣意」(1950年)といった組織設立時に執筆された文書をはじめ、卒業式ほか各種式典等での式辞原稿、様々な学内刊行物への寄稿がある。下表は学習院の校友会雑誌で、戦後は1948(昭和23)年から刊行された『輔仁会雑誌』に掲載された安倍の文章の一覧で、晩年までほとんど毎号寄稿している。同様に『学習院新聞』(1949～1965年)に40本、『学習院大学新聞』(1953～1964年)に9本、学習院初等科の文集『小ざくら』(1951～1966年)には14本の寄稿が確認された。さらに大学の研究紀要や文化祭パンフレットの巻頭言ほか、未確認の寄稿がまだある。院長在任中(1946～1966年)の安倍は、学習院のために書きまくっていた。理事長や学長・校長をつとめていれば寄稿は当たり前の仕事であるが、在任期間が長いこと、私立学校となった学習院の経営を立て直さなければならぬ状況に置かれていたことを差し引いても、歴代院長のなかで安倍の発信力には図抜けたものがあつた。

	表題	号数	発行年月
1	学習院今後の方針	170	1948年 1月
2	さし向きの願ひ	172	1950年12月
3	序に代えて	173	1952年 2月
4	出立の辞	174	1952年12月
5	アメリカで遇った学習院出の人々	175	1953年12月
6	輔仁会雑誌に題す【巻頭言】	176	1954年12月
7	巻頭言	177	1955年12月
8	巻頭言	178	1956年12月
9	輔仁会雑誌に寄せて	179	1957年12月
10	【巻頭言】 輔仁会雑誌に寄す	180	1958年12月
11	【巻頭言】 輔仁会雑誌に寄す	181	1959年12月
12	【巻頭言】 輔仁会雑誌に寄す	183	1961年12月
13	【所感】	184	1962年12月
14	貴い存在	185	1963年12月
15	巻頭言	186	1964年12月
16	【巻頭言】	187	1965年11月

表『輔仁会雑誌』掲載安倍能成寄稿記事

学生生徒への発信

その発信の向かう先として、安倍が重視していたのは学習院の学生生徒だった。以下は『学習院新聞』81号(1958年12月16日)に掲載された「そゝろ言」というエッセイの一部であるが、安倍の本領はこうした学生向けの「雑文」にこそ発揮されたのではないか。

プラトーンが「シヨムポジオン」(饗宴)という対話の中で愛を論じていたのは、誰も知る所である。その中で彼はソクラテスの口を借りて、愛は神でなくダイモンだといっている。ダイモンは英語のデモンであって、普通は悪魔と訳されているが、守り神や霊という意味があり、ここでは悪魔の意味ではなく神と人との間にあるまあ霊的な存在であって、日本語で何と訳していいかわからない。エロスというデモンは貧弱という女神と豊富という男神との間に生まれたものであって、父に似て豊富になろうとする素質を持って居るが、母に似て現実はまだことに貧弱である。しかし満ち足りている者は求める即ち愛することはない。現実が貧弱だからこそ大いに求めようとするのだが、豊富という素質が底になれば貧弱を貧弱とも思わず、そのままいつまでも貧弱に安んずるであろう。貧弱の自覚は貧弱に安んじさせない、どうしても豊富を求める。だからエロスは愛せられる者(beloved)でなく、愛する者(lover)である。自分は美しいと自惚鏡に見とれている者でなく、醜くても美しさを呪わず、美しさにあこがれる者である。

これを知識についていえば、知らざるを知って知ろうとする者である。いくら美しくても人間の美しさは知れたものである。それを美しいと得意になっている内に、その顔には白痴の影がさして美しくなくなる。自分の無知を知って知ろうと思う者には、絶えざる知識の進歩がある。現代に於ける科学の驚くべき進歩は、科学というもには人間の知らぬ境界が比較的はっきり分かるから、それを知り究めようとの要求が起らずには居られないからである。君たちには昔の人の語ったこの寓話の意味が分かったかね。時々は会ってこんなことも話して見たい。

高田は、「現在、安倍能成の名が一般にもほとんど忘れられ、彼の学問的業績が言及されることは皆無に等しい」(前掲②)と述べている。学習院に在職していれば名を忘れることはないが、筆者は安倍の学問的業績を繙いたことがなく、院長時代に執筆した「雑文」の概要も把握できていない。「雑文」と見過ごしてはならないものも結構あるのだと改めて実感した。『安倍能成学習院教育論集』のようなものを、編纂できないかとぼんやり考えている。

京都学習院の事務文書

—ある雑掌の備忘録

学習院アーカイブズ 小根山 美鈴

1. 京都学習院文書（資料群番号：F0006）の存在

学習院アーカイブズが所蔵する主な資料の年代は、学習院創立期の明治10（1877）年から、特に宮内省所轄の官立学校となる明治17年以降が大半を占める。一方、収蔵庫の一角に幕末期京都の学習院の資料が息を潜めている。19点という小規模な資料群（図1）だが、入手先や学習院アーカイブズへ来るまでの経緯などの来歴が長年わからなかった。ただ、大久保利謙が執筆した「第一章 京都の学習院」（『学習院百年史 第一編ⁱ⁾』）において、現在の学習院の起源が京都の学習院にあることを叙述するに際し、典拠資料のひとつとして使用されたことを筆者は知るのみである。本稿では、この資料群を紹介する。



図1 京都学習院文書の全体

2. 京都の学習院雑掌による事務文書

京都の学習院は、弘化4（1847）年、開明門院跡地に開講された公家の子弟のための学習所である。三度の改組を経て明治3（1870）年7月に京都府へ移管、幕を閉じる。現代に残る旧蔵資料のうち、漢籍・和書に比べて事務的な文書は残存数が少なく、現時点でわかる限り、学習院の他に宮内庁書陵部にとどまるⁱⁱ⁾。

本資料群は京都の学習院雑掌、井上主税（源度^{たび}定。以下、「度定」という。）が作成・取得した事務文書で構成されると考えられる。必ずしも全ての文書に度定の名が明記されているわけではないが、筆跡や文章のスタイルなどから総合的に判断した。年代範囲は、弘化3（1846）年から嘉永7（1854）年までのものが中心であり、とんで明治元（1868）年9月、度定の二男、雅楽による弁事御役所への皇学所勤務

嘆願書（「奉願上並口上書」）が最後となる。

学習所開講当初に任命された雑掌は、度定の他、座田右兵衛尉（紀維貞）、稲波主膳（源誠）の計3名だった。雑掌とは地下（朝廷の官人の身分呼称）が任じられる庶務にあたるが、教科目である素読や輪読の手伝いもし、のちに講師も勤めるようになる。度定の人物情報については、他の二人に比べると人物辞典や各種論考等においても情報が得られていない。本資料群が度定を知る糸口になるだろう。

3. 資料紹介

（1）：「弘化三年丙午後五月 学習所雑掌被 仰付 御内意後之備忘」（図2）

本資料は、度定が備忘として記した日誌の初出である。冒頭では、天保13（1842）年11月、学習所設立に先立ち、雑掌の任務を内々に打診された頃のことを遡って以下のように記されている。

一 朔日乙巳此日於 御前習学院弥御造立之趣
二付 先達尊申雑掌役度定被召加候御沙汰議 右之御請申上候哉 密ニ御内意被仰出且…（後略）
一 三日丁未 今日於御前御請申上候事

ここでいう「御前」とは、東坊城聡長（1800～1861年）を指すのであろうか。日誌は弘化3（1846）年5月8日から本格的に綴られるようになるのだが、翌9日に雑掌として任命後、関白等へ回礼する際、「東坊城家家来 井上主税」と記していること、先の「奉願上並口上書」によると、父、度定は嘉永7年7月まで東坊城家に仕えていたとする記述などの情報から推測した（翌安政2年に度定死去）。東坊城聡長は学頭兼奉行として伝奏（院長格）



図2 表紙。右下は学習院図書館（当時）の受入後、貼られた付箋

の下で京都学習院の運営を主宰する役職を任じられている。

日誌は、弘化3年7月9日までのことが記されている。儒者への推薦状送付など講師となる人材の確保、御文庫の白土塗りの完成、地鎮祭が予定されるも風雨被害や新清和院崩御などが続き、開講が延期されるものの、翌年の学習所開講に向けて準備が整っていく様子を垣間見ることができる。

(2)「嘉永二年正月 御会日其外諸入用品之申立控」

本資料は、漢・和御会（漢籍と和書の講義・読書）や、日常に要する諸物品の購入記録を帳面にまとめたものである。1月最初に、年番日記諸帳面用として和紙を用立てている（図3）。雑掌のうち一名が年番として割り当てられる制度があり、年番の雑掌はその年の日記を担当する。年番日記とは、宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵の「学習院仮日記」、「学習院御日記」が該当すると考えられるⁱⁱⁱ⁾。

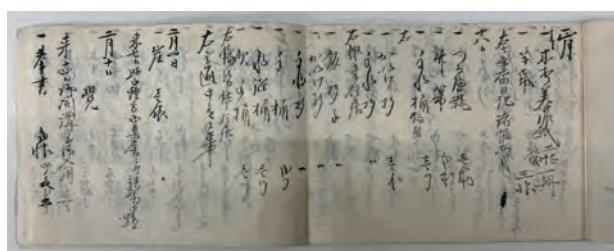


図3 「嘉永二年正月御会日其外諸入用品之申立控」

特筆すべきは嘉永2(1849)年4月9日の記述である。

一 学習院御額御用達も総而御内儀より被出候
由 仁孝天皇様被仰遣之由右ニ付 非常之節心得第一たるべく被仰渡之事

光格天皇、仁孝天皇の遺志を継ぎ、孝明天皇期にようやく実現したこの学習所は、同年4月7日、右大臣近衛忠熙の染筆にかかる勅額「学習院」の下賜により、学習院の名称が公定された。上記はその2日後に勅額の扱いについて申し渡されたことを物語っている。

4. 雑掌の記述からみる京都の学習院とは

前述の資料以外にもさまざまな文書がある。明楽大隅守（明楽茂正。弘化4年当時は禁裏附か）より、雑掌が提出した年度予算額について再検討せよという書状や、雑掌3名による待遇改善嘆願書控、嘉永7(1854)年4月6日、後院北殿（現在の京都大宮御所）火災の際、度定は病気のため出仕が遅れてしまったため、翌月、自身の進退を申し出る口上書控などが

残されている。

雑掌は京都の学習院運営に身近に関わっていた役職だけに、記載事項も日常的な動向が主体であり、より現実味を帯びた学習院の姿がみえてくる。慌ただしく開講の様子、幕府監視の下に切りつめた財政状況、通っていたのは公家子弟だけでなく非蔵人が多かったことなどの姿である。

さらに、井上主税という一雑掌の人物像も、資料を通して閲覧者に伝わってくるものがあるのではなかろうか。ぜひ閲覧いただき、多様な視点から資料を解明いただければと思う。

資料の入手先については、2022年にひょんなことから判明した。「雑件録 昭和12年」によると^{iv)}、昭和12(1937)年に京都市在住の個人より学習院へ寄贈されたもので、学習院図書館（現在の学習院大学図書館）が受領し、保管していた。京都学習院の事務文書は、明治以降どのような道を辿ったのだろうか、さらに謎が深まった。

最後に、今年5月、勅額の由来調査のため京都出張に赴いた折、京都御苑内の「学習院発祥の地」を訪ねた（図4）。それは京都御所建春門のすぐ近く、京都大宮御所に隣接する場所である。



図4 学習院跡地から見た建春門

- i 学習院百年史編纂委員会編、学校法人学習院、1981年3月。
- ii 京都の学習院旧蔵資料の行方については、橋本佐保「京都学習院旧蔵資料・勅額「学習院」（「学習院アーカイブズニューズレター」vol. 08、2016年7月）に詳しい。
- iii 宮内庁書陵部所蔵資料目録・画像公開システムで検索すると、国文学研究資料館国書データベースへのリンクがあり、残存する両資料の全文画像が閲覧可能。
- iv 「旧京都学習院雑書類寄贈ニ関スル件」（資料群番号：S0037、学習院アーカイブズ蔵）

〈参考文献〉

- ・本多辰次郎「学習院創建及其沿革」（『史学雑誌』26篇4号、1915年4月）
- ・『学習院史：開校五十年記念』（学習院、1928年10月）
- ・大久保利謙「幕末京都の学習院」（『明治維新と教育』大久保利謙歴史著作集4（オンデマンド版）、吉川弘文館、2007年10月）
- ・佐竹朋子「学習院学問所の果たした役割」（『近世の天皇・朝廷研究大会成果報告集』朝暮研究会編2、学習院大学人文科学研究所、2009年3月、pp.119-146）

主な活動（2025年2月～6月）

◆文書ファイルの整理・管理

- ①各事務部署における文書ファイル管理簿の作成・更新
- ②非現用文書ファイルの評価選別（4部署）
- ③各部署に保管されている評価選別済保存文書の移管（2部署）
- ④文書管理に関する支援

◆学内各部署に保存されている資料の調査・整理

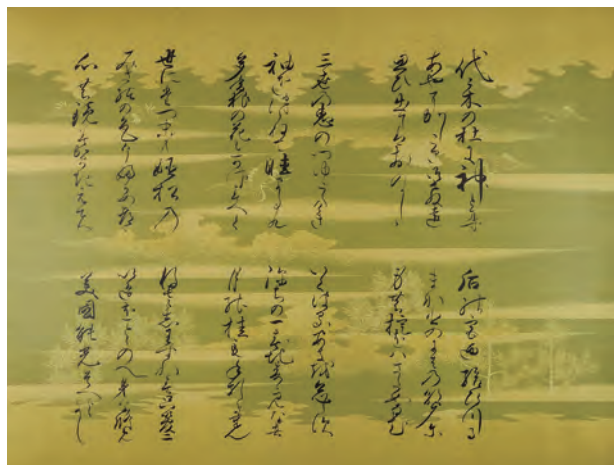
- ①幼稚園事務室資料
- ②女子大学収蔵資料管理運営委員会所蔵・管理資料
- ③総務部総務課資料

◆所蔵資料の整理・保存

- ①移管文書の選別・整理・目録作成
- ②学内刊行物、書籍
- ③劣化資料に対する保存修復
8ミリフィルム4本のデジタル化

◆資料受入れ（受贈）

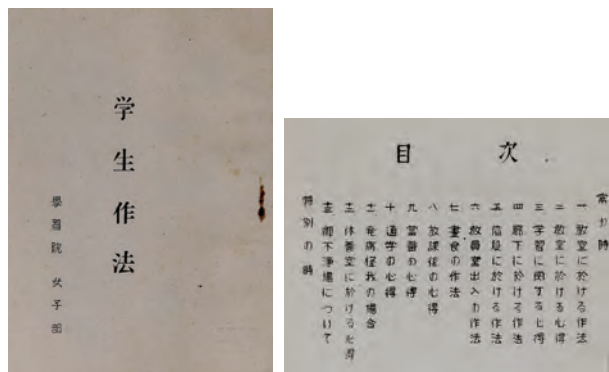
- ①150周年記念事業関連資料
- ②記念品類（業務戦略渉外部作製）
- ③学習院初等学科、中等学科資料
- ④昭和寮資料
- ⑤各種記念メダル
- ⑥皇太后陛下御歌「月の桂」色紙複製



皇太后陛下御歌（昭和9年5月28日下賜）

⑦女子学習院「教学聖訓」（昭和17年6月）

⑧学習院女子部「学生作法」（昭和26年）



学生作法（目次は上段部分のみ掲載）

◆講演会、教育・広報支援等

- ①新任職員研修「学習院の歴史—史資料から見る学習院の教育・キャンパス・学生—」（4月1日）
- ②文学部史学科専門科目「アーカイブズ学演習」への協力
- ③文学部英語圏文化学科専門科目「言語・教育コースゼミナール」への協力
- ④東洋文化研究所一般教育プロジェクト「戦時期の学習院と東アジア」への協力
- ⑤女子大学学芸員課程「博物館実習」への協力
- ⑥大学史資料協議会東日本部会研究会への協力
- ⑦経団連「Forum21・フォローアップ研修」への協力

◆学外資料調査

- ①京都府立京都学・歴彩館所蔵学習院関係資料調査

学習院アーカイブズ・ニュースレター第25号
2025（令和7）年7月16日発行

編集・発行 学習院アーカイブズ
Gakushuin Archives

〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1
TEL 03-5992-1285（直通）
事務局 北別館

<https://www.gakushuin.ac.jp/houjin/archives/index.html>